



地
子
地
可
12
全

中村俊定文庫
文庫 18
1050





梅孫傳



宗因と能及の國の人姓西の澤豊一何名次〜
 前サキのつ代廣かある凡庵子の家也寛永の年ノ〜
 か〜
 あり〜
 の寺の〜
 今〜
 のナキ〜
 又孫と一妻と西の梅の梅の〜

とあるに於ては、
この書は、
後、
此の
長を編
此の書は、
宗因、
昌林、
か

昌林、
か

昌林、
か

昌林、
か

喜よる人よとて

わのこころと神よのこころなりかともは
五月雨や日暮のやうに秋の宿
里のこころをわたりてゆく
あふもをを先りてあふ
松よこれゆきや秋乃夕に
あふれあふれはもりの秋の
うらむしをあふれ夕月
あふれも松をあふれを

あふれよ幸光よ秋のこころ

人のこころはよもひやあふれよ
朝しるきつるもえきを夕月
あふれ乃れくあふれ
あふれけくあふれ
あふれよ

一西よる秋あふれ
あふれを
あふれ

休詰散白むらゝ

子因

春

新書の抄きふくまひていそあつた
ちきりつゝいそあつたてのつら
まをながくはなれり
春や先き方々いそあつた
おもしろい人いそあつた
あつたのいそあつた

自光とてしる

まや何ふよりのそよ風の春

はらり

さきあつてついでにの端やきり

おぼんつやあつてついでにの松のうら

わたり

あつてついでにの松のうら

梅のうら

とて自ふ梅やうら

あつてついでにの松のうら

梅のうら

うら

あつてついでにの松のうら

梅のうら

り

あつてついでにの松のうら

小町の繪巻

あつてついでにの松のうら

花下はるかに暮る一軒よるる子歌

岩城の城さしひくくし居る

あまのくにさるるを家

夏はあれと暮るるをさるるの世らるる

わらわらふも懐かきなる中に

あまのくにさるるを家

あまの国の世らるるをさるる

あまのくにさるるを家

あまのくにさるるを家

江戸のそと

花むしる一ふんせりやと存る

江戸をさるるを家

西行法師のちるあしと

あまのくにさるるを家

あまのくにさるるを家

あまのくにさるるを家

春の中れらるるを家

あまのくにさるるを家

依夜の中へ

是しりくさるねの中へ

おぼろのまろ

おぼろ

あま入を言しわ

漢別奥昌寺宗鑑法師

一巻夜舞舞の節を

あま入を言しわ

あま入を言しわ

今夜波流る

いふハをよのうけの

あま入を言しわ

友

あま入を言しわ

あま入を言しわ

あま入を言しわ

市部

業續屋もくしんきんちんはひひ

やあしんきんちんはひひ

あしんきんちん

新ららら鬼針もちんちん

新ららら鬼針もちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

一時新大坂屋の初会

あしんきんちんちんちんちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

あしんきんちんちんちんちんちん

鎌倉のうら

何れもあつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

土佐のほのほの園

人丸のほのほの園

あつたはるのほのほの園

新向のほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

あつたはるのほのほの園

秋
秋のついでに
人かみれ輪をよあしきり河津川

秋

まのついでに
秋や来るのついでに
秋のついでに
月の子のついでに

秋

秋のついでに
秋のついでに
秋のついでに
秋のついでに
秋のついでに
秋のついでに
秋のついでに
秋のついでに
秋のついでに
秋のついでに

秋

秋のついでに

七世くらね秋の感し

も舟のなかのちやちよの秋
きききききききききききき

ある人けりハ海邊の落れある
より秋のちやちよのちやちよ

伊子村のちやちよのちやちよ

地蔵野のちやちよのちやちよ

天も酔いさすや伊子の大地蔵

そのちやちよのちやちよ

ちやちよのちやちよのちやちよ

確るちやちよのちやちよ

池田村のちやちよ

原のちやちよのちやちよ

ちやちよのちやちよ

ちやちよのちやちよのちやちよ

官給のちやちよ

級ちやちよのちやちよのちやちよ

繪巻

ちやちよのちやちよ

おれ様よあつたの〜と早よ二時〇時
勝も〜と涙もぬすくもえしりな

久あ寺ありて

而の林久あんち〜と名は〜と
ち〜と唐茶の杯の最〜と
賤屋より秋を〜とやあまら
あ〜とやそ〜と別あつたよ

あつた茶を〜と

一ちや先うよや積〜とあ〜と

月もやほあつた秋の古〜と
草〜と先月〜と
友人やあ〜と月も
あ〜とあ〜とあ〜と

紀の〜と

大師の海あつた月〜とあ〜と

み〜とあ〜と

儂あ〜とあ〜とあ〜と秋の〜と
月あ〜とあ〜とあ〜と

みゆのこころのこころのこころのこころ

大坂

はかりまじくを隣りて居る

酒一升一たり一たりはついで

は白のまじりのある酒家にてはの
まよふ事なりしをいふのまじりて
来しとてある情の面よりの
ら

鴨

秋きみのけしき

み

いふのこころのこころ

おれやうはつていふのこころ

幸子の名

是を信じていふのこころ

一羽の口をいふのこころ

みゆのこころ

いふのこころのこころ

大

あゝ茶を飲むに二也

庭を歩くもかきつらきよし

冬人やしつとまじりて一時の

志らるれよと独ちやわのて録

し、綴りあそびまけんや作旅

社末

を信じて

まじりのわたりくは栞の巻

を旅栞社や茶のむきや娘

くちかのみよしあゝ茶を飲むの女

あゝ茶を飲むに二也

あゝ茶を飲むに二也

あゝ茶を飲むに二也

栞別るぬ録

茶の松う録もろしき名あゝ

茶を飲むに二也

あゝ茶を飲むに二也

あゝ茶を飲むに二也

あゝ茶を飲むに二也

あつた切の先一とやと
おとらや念佛の石を
名塚の石を
あつたや念佛の石を
あつたしと
と
あつたしと

安永六年丁酉秋九月

江戸本石町十軒店

山崎金兵衛

京都堀川佛光寺上

錢屋莊兵衛

書林

大坂高麗橋壹町目

野村長兵衛

